

# 小学校音楽科の音楽づくり・器楽合奏にかかわる授業づくり

和歌山大学教育学部：菅 道子（研究代表） 上野智子

和歌山大学教育学部附属小学校：内垣美佳 北川真里菜

## 1. 研究の趣旨と経過

本取組は、大学教員と小学校教員とが連携し小学校音楽科の教材開発ならびに授業づくりについての実践的研究を行うことを目的として協同研究を行うものである。今年度の取り組みは下記の通り。

- ・2018年8月8日 能の授業づくり講座への参加：上野・菅が主催したお能の授業づくり講座に内垣・北川両教諭も参加し、日本の伝統芸能として能楽の教材化するための具体例について検討するとともにゲストティーチャーの能楽師小林慶三先生より「羽衣」の謡と舞の実技指導を受けた。
- ・10月27日 附属小学校教育研究発表会での授業実践と研究協議：2018年度附属小学校では「未来に生きて働く資質・能力の育成—探求的な学とカリキュラムデザイン—」をテーマに公開研究授業と研究協議を実施した。そこで内垣教諭は第6学年の音楽科授業において郷土の音楽教材として「串本節」を取り上げ、その教材開発と授業づくりを実施、北川教諭は第2学年の鑑賞を取り入れた音楽づくりの教材開発と授業づくりを実施、当日の協議会には上野・菅も参加し研究協議を行った。

二つの教材開発の実践についての概要は次の通りである。

## 2. 第6学年を対象とした小学校学校音楽科の器楽合奏にかかわる授業づくり

—郷土の音楽を教材とした実践をとおして— （内垣美佳）

### 2-1. 研究の目的

本研究の目的は、郷土の音楽に愛着をもち、多くの人々に郷土の音楽のよさを伝えようと、思いや意図をもって表現する子どもを育てるための器楽の指導方法を探ることである。

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）の指導計画の作成と内容の取扱いの項において、「我が国や郷土の音楽の指導に当たっては、そのよさなどを感じ取って表現したり鑑賞したりできるよう、音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」と新たに示され、我が国や郷土の音楽の指導方法の工夫がますます求められている。本研究では、和歌山県民謡「串本節」を教材として取り上げる。「串本節」は全国的に有名な民謡であるにも関わらず、和歌山県の中においては、教材として音楽の授業でほとんど扱われていないのが現状である。器楽の活動の中で、「串本節」を教材化する意義を見出しながら、学校行事との関連を図った題材構成や、ゲストティーチャーとの連携を取り入れた授業実践をとおして、郷土の音楽を教材とした器楽の指導方法について探っていく。

### 2-2. 研究方法

#### 2-2-1. 学校行事との連携を図った題材構成

郷土の音楽である「串本節」を教材化するにあたって、子どもたちに愛着をもたせられるかどうかが重要であると考えた。指導前に、「串本節」を知っているかどうかを30人学級で尋ねたところ、「知っている」と举手したのは2、3人程度であった。

そこで、今回、本校の学校行事や音楽会など、演奏を発表できる行事をカリキュラムの中に積極的に取り入れることにした。聴き手を意識しながら合奏する機会を重ね、自分たちの演奏を振り返る場面をつく

ることで、次の4つの力や態度が身に付くと考えた。①曲の特徴にふさわしい表現を工夫する力、②音を合わせて演奏する技能、③音楽活動に対する達成感や充実感を高める、④郷土の音楽に親しむ態度

## 2-2-2. ゲストティーチャーとの連携

今回、和太鼓（宮太鼓・締太鼓・平太鼓）やチャップ、すりがね等の和楽器を取り入れた器楽合奏を行う。それに際して、地域の和太鼓の指導者をゲストティーチャーとして招く。構え方や演奏方法などを具体的に教えてもらい、音色や響きに気を付けて演奏する技能を身に付けさせる。

## 2-3. 授業の実践

ここでは、平成30年度に行った題材『郷土の音楽に親しもう～「串本節」の魅力を伝えよう～』（6年生）の実践について報告する。

### 2-3-1. 和歌山県民謡「串本節」について

本州最南端の町、和歌山県串本町で生まれた民謡である。江戸時代末期、「エジャナイカエジャナイカオチャヤレ」とはやして、祭礼の神輿行列唄として歌われていたことから「オチャヤレ節」「エジャナイカ節」とも呼ばれ、後に、三味線に合わせたお座敷唄になったと伝えられている。しかし、起源については定かではないようである。拍にのったリズムで歌われ、女踊り、男踊りの振り付けがある。歌は、18番ぐらいまであったようである。授業ではその中から教材としてふさわしいものを3つ取り出し、1番・2番・3番として扱うことにした。大柿かおる氏によって編曲された楽譜を器楽合奏用として扱う。

### 2-3-2. 題材設定の理由

本題材では、まず、「串本節」を教材とした鑑賞の活動をとおして民謡のよさや面白さを感じ取らせ、民謡特有の声の音色や節回し等の音楽の構造との関わりについて気付かせる。

第二次では、鑑賞の活動での学びを生かしながら、歌唱の活動を展開する。仲間と声を合わせて民謡を歌う楽しさを味わわせたいと考え、6人のグループ活動を取り入れ、範唱を繰り返し聴きながら真似て歌う。歌い方を工夫したり、息の使い方を意識したりしながら、曲想に合った自然な歌い方で歌える力を身に付けさせる。

第三次では、器楽の活動をとおして、音のバランスや全体の響きに気を付けながら、曲の特徴にふさわしい表現を工夫できるようにする。また、「串本節」の主旋律を引き立たせる音量のバランスなどについても考えさせる。まとめとして、歌、踊り、器楽合奏をつなぎあわせ、学校行事で演奏を披露する。思いや意図に合った演奏の仕方ができているかどうかを見直ししながら表現を工夫して演奏する力を育てる。

題材の目標は、「民謡のよさや面白さを感じ取りながら、曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、どのように演奏するかについての思いや意図をもち、協働して音楽活動をする楽しさを味わうことができる」とした。

### 2-3-3. 学習展開の実践（第三次 器楽）

第三次では、6年生全体96人で器楽合奏に取り組んだ。主な旋律をリコーダーや鍵盤ハーモニカが担当し、アコーディオン、キーボード、木琴、鉄琴などが主な旋律と副次的な旋律を行き来する。低音パートは低音オルガンとバスアコーディオン、リズムパートは和太鼓、すりがね、チャップである。各学級の音楽の授業でパート練習や個人練習を重ね、何度か学年で合わせた。パート練習の際、和太鼓のゲストティーチャーを招き、奏法について指導してもらった。

また、歌、踊り、器楽合奏をつなげて、学校行事の中で演奏を披露した。学校行事で発表した自分たちの演奏を振り返る活動では、子どもたちが主体的・協働的に課題を見つけ、より良い演奏にしようと表現の工夫について話し合い、実際に演奏しながら試そうとする姿が見られた。子どものワークシートには、「本番の時、客席にいる人にとって、この演奏はどんなのか、というのを考えるようになりました」「踊ったり演奏したりして、串本節に愛着がもてた」等の記述があった。

## 2-4. 研究協議を踏まえての授業の成果と課題

授業は、一般参加者も含めて授業についての研究協議を実施した。そこでの議論内容、並びにそれを授業の成果と課題については次のように整理する。

研究協議では、子どもたちが自分たちで課題を見つけ、曲想にふさわしい表現を工夫していく場面において、曲全体の構造を視覚化しながら理解させることの必要性について意見が出された。また、本実践をととして、郷土の音楽に愛着をもち、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって表現する力を育むためには、鑑賞・歌唱だけでなく、器楽や学校行事との関連付けが効果を得た。短い時間であったが、ゲストティーチャーからの指導を受けたことで、和太鼓を演奏する子どもたちの意欲は高まり、演奏する姿勢や音色も格段に良くなった。郷土の音楽に親しむ態度の育成を図るためには、地域等の指導者や演奏者との連携が大切であると実感した。

さらに、知識を先に与えるのではなく、昔から伝わる歌い方を真似てみたり、歌に合わせて踊ったり、和楽器を取り入れて演奏したりするなど、実際に体験しながら学ばせることが、民謡に親しみ、民謡の特徴を感じ取らせることにつながることもわかった。8月にお能の授業づくり講座に参加し、その大切さを改めて実感した。これからは、和楽器の旋律楽器の指導の方法や、系統的に郷土の音楽について学習できる指導の方法についても研究を進めていきたい。

## 3. 第2学年を対象とした小学校音楽科における音楽づくりに生きて働く鑑賞の授業実践「リズムで大へんしん！いろいろな子犬にへんそうしよう」(北川真里菜)

### 3-1. 研究の目的

国立教育政策研究所による小学校学習指導要領実施状況調査(2015)によれば、「音楽の授業で、音楽をつくるのが好き」と回答した児童は約5割、音楽づくりの指導内容について「児童が身に付けやすい」と回答した教師は約2割しかいないことが明らかとなった。音楽づくりは、時間がかかり指導が大変な割に「何を学んだのか」がわかりにくい。また、つくること自体が目的化してしまっている傾向にある。

それらの課題を受け、思いや意図をもって音楽をつくれるよう、学んだことを実感しその学びを活用して次の学びへと生かせるよう、鑑賞と音楽づくりを効果的に関連付けたいと考えた。

### 3-2. 研究の方法

鑑賞→音楽づくり→鑑賞の題材構成によって、鑑賞することで学んだことを音楽づくりで生かす、または音楽をつくることで体験的に学んだことが生きて鑑賞が質的に高まるなど、知的音楽的理解と表現活動を往還しながら学びが生きて働く場面を題材の中で意図的に設定する(表1)。その際は、〔共通事項〕を鑑賞・音楽づくりの双方に共通に位置づけ、題材を貫く指導事項とする。

### 3-3. 授業の実践

次	時	学習活動
鑑賞	1	『きらきら星』がへんしん！ へんしんアイテムをみつけよう 『先生作きらきら星変奏曲』聴き、 変奏曲の仕組みを知る。
	2	へんしんした『きらきら星』を えんそうしてみよう 『先生作きらきら星変奏曲』を鍵盤 ハーモニカで演奏する。
音楽づくり	3	へんしんアイテム「リズム」を つかって、いろいろな子犬に へんしんしよう！ リズムなどを変化させて『子犬のマー チ』の変奏をつくる。
	4	「子犬のマーチへんそう曲」を つくろう！ グループで変奏をつなげ、 ひとつの変奏曲をつくる。
	5	「子犬のマーチへんそう曲」 発表会をひらこう！ つくった変奏曲を聴き合い、 リズムや他の要素がどのように変化 しているか、話し合う。
鑑賞	6	モーツァルトがつくった へんそう曲をきいてみよう！ 『きらきら星変奏曲』を聴き、 リズムの特徴やそのよさを 味わって聴く。

表1:「リズムで大へんしん！いろいろな子犬にへんそうしよう」題材計画



ここでは、「リズム」を指導事項とした第2学年における題材「リズムで大へんしん」より、第1時の鑑賞授業を取り上げる。

日時：2018年10月27日（土）第1校時 対象：和歌山大学教育学部附属小学校 2年C組 30人

題材名：リズムで大へんしん！いろいろな子犬にへんそうしよう

題材のねらい：○表したいイメージの変奏をつくることで、リズムを聴き取り、そのよさや面白さを感じながらリズムの効果や働きに気付くことができる。


○曲想とリズムの関わりに気付き、変奏曲を味わって聴くことができる。

本時の目標：リズム等を聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、星の様子や表情を想像して聴くことができる。

学習活動	教師の働きかけ
<p>○『きらきら星』を歌う。</p> <p>今日は、先生『たのしくおどっているきらきら星』をつくってきたよ。</p> <p>○変奏1を聴く。</p> <p>・なんだかいつものきらきら星とちがうぞ。 ・はねているみたいなきらきら星になった。</p> <p>『きらきら星』が へんしん！へんしんアイテムをみつけよう！</p>	<p>・つくった音楽を鍵盤ハーモニカで演奏することで、次時に向けて子供たちの「やってみたい！」という意欲をもたせる。</p>
<p>○変奏1が、どうして題名のようなきらきら星に変身したのかを考える。</p> <p>・2回おしている。・つけたしで、同じ場所で、はねかえっている。・同じところを押さえておいて腕を下下、下上する。・普通は「タンタン」やん。でも先生が弾いたのは、はねている感じ。</p> <p>みんなが言ってるのって、こういうことかな？ へんしんアイテム <b>リズム</b>！</p> <p>○手拍子したり、歩いてみたりしながら、リズムが変わったことを確認する。</p> <p>・そういうことか！ ・もう一回聴きたい。普通の（テーマ）から弾いて。</p>	<p>・リズムカードを提示し、リズムの変化によって星の感じが変わったことに気付かせる。</p> <p>・使われているリズムを全員でたたいたり体を動かしたりしながら、リズムの特徴を捉えさせる。</p>
<p>○変奏2・3を聴いて題名を2つの選択肢から選び、その理由を話し合う。</p> <p>・変奏2は『ゆっくりお話しているきらきら星』。よびかけとこたえみたいに高い音→低い音になって、お話してるみたいだったからです。ターってのびているようなリズムでした。</p> <p>・変奏3は途中でシューって、タタタタ流れてるみたいに弾いていたから、『流れ星のきらきら星』ってわかりました。</p> <p>・やっぱりそうや！ ・タータや。 ・手拍子やってみよう</p> <p>こんなリズムをつかったよ！ （リズムカードの提示）</p>	<p>・『ゆっくりお話している双子のきらきら星』『流れ星のように流れるきらきら星』どちらの題名かを選ばせる。考えた理由を交流させる中で、星の様子とリズムとの関わりがわかるようにする。</p> <p>・使われているリズムを全員でたたいたり体を動かしたりしながら、リズムの特徴を捉える。</p>

○手拍子したり、歩いてみたりしながら、どんなリズムが使われていたか確認する。

○変奏4を聴いて題名を考え、ワークシートに記入する。  
考えた題名と、その理由を話し合う。



○本時の学習を振り返る。

・いろいろなリズムと子犬が出てきて、楽しかったです。

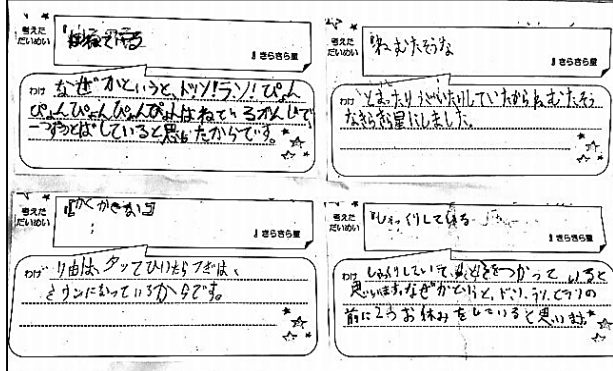
・前に習ったよびかけとこたえと、今日「リズム」も変身アイテムが増えて、うれしいです。・タータと のばしているリズムがおもしろかったです。

○変奏曲の特徴、つくり方を知る。

- ・題名を考えた理由を交流させる中で、星の様子とリズムとの関わりがわかるようにする。
- ・リズム以外の要素に関する気付きも、積極的に取り上げる。

**知**リズム等を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、曲想とリズムとの関わりに気付いている。

- ・「テーマ」「変奏」「変奏曲形式」という言葉を示し、説明する。



### 3-4. 研究協議を踏まえての成果と課題

研究協議では、子供と子供の間教材を投げ込む進め方や、他の子の動きを見ながら動作化をすることで学びを深めていくなど、鑑賞学習の様々な可能性について考えることができた。

本時で学んだことを次時の音楽づくりに生かす場面で、そこで教師の枠を超えていく子どもをどこまで許容し全体で深められるか、子どもの学びと教師のもつ意図やねらいについて考えることができ、今後の学習でより「リズム」について深めていきたいと感じた。

第3時の音楽づくりでは、ねらい通り第1時の教材で使われていたリズムを積極的につかう子供が多く、第1時での鑑賞活動が生きて、どの子も意欲的に音楽づくりの活動に取り組むことができた。

様々な様子や表情の子犬を表現しようと、「先生が使ってたタータのリズムつかおうかな。」「タタタタってしたら、走っているみたいになった。」など、思いや意図をもってリズムや他の要素を様々に変化させて変奏をつくることができた。

第1時の鑑賞では「2回鍵盤を押していた」などといった言葉でリズムの変化を表現していた。また、リズムよりもこれまでに学んだ要素を手掛かりとして音楽を聴いていた。しかし、第6時の鑑賞活動では「リズムが使われていた。」と、リズムに着目した聴き方ができるようになり、「タータのリズムと、低い音がつかわれていたので、～なきらきら星だと思いました。」など、リズムや他の要素の特徴と曲想の関わりに触れながらそれぞれの変奏の題名を考えることができた。題材が進むにつれてリズムそのものやリズムと曲想との関わりについての理解が深まったことがわかり、これは題材構成における大きな成果だと感じた。

また本題材では、鑑賞と音楽づくりの双方において、変奏でつかわれたリズムを可視化し、手拍子や動作化などで共有化することで、それぞれのリズムがもつ働きや効果について学級全体で理解を深めることができた。これによって、「こんなリズムを使うと、子犬のこんな雰囲気や様子が表せるんだな。」ということ、鑑賞だけでなく実際につくる活動を通して、どの子も体験的に学ぶことができた。

今後も、このような題材構成を工夫することで、学びを活用できる子供の育成に努めたい。

